



今、ちょっと気になることの一つに「依存」と「自立」の問題があります。

健康や生活環境など個々に異なるので一概に否定するつもりはありませんが、例えば、自分の生き方を占いに頼ったり、常に仲間とつながっていないと不安でメールを送り続けたり、まわりに合わせようとして自分を追い込んでいく人が多いように思われます。

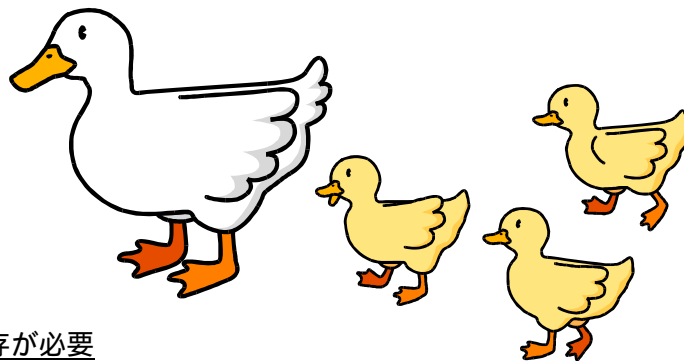
また、自立したい欲求に駆られて家を出ても、それだけの力が育っておらず、とんでもない世界に引きずり込まれるなど、悲しい事件もあとをたちません。

自立とは、自分の頭で考え、自分で行動し、その結果に対して責任を持つということです。どんなに行動的であっても「親が買ってくれないから」とか「みんなだってやってるよ」など、失敗や間違いを人のせいにするのは、無責任なわがままです。

また、一言で自立といっても、食事・排泄・着衣など、幼児の身の自立から「経済的な自立」や「女性の自立」更に「国際関係の自立」など、幅広く使われる言葉です。しかし、自分で考え、自分で行動し、自分で責任をもつ、という意味では変わりありません。

では、いつ・どのようにすれば、このような力が育っていくのでしょうか。また、今、育ちにくい要因があるとしたら、どこにあるのでしょうか。

今回は、このことについて考えてみましょう。



自立するには十分な依存が必要

哺乳動物の赤ちゃんは生まれて間もなく立ち上がり、お母さんのオッパイを求めて吸うことができます。しかし、人間の赤ちゃんは何もできない、いわゆる「全面依存」の状態で生まれます。

何故なら、人間の脳は非常に大きく、140数億個といわれる脳神経細胞を、全てお母さんのお腹の中にいる間に作られるために多くの時間が必要で、他の動物のような状態になるには、更にあと1年かかるわけです。

それでは母体がもたないので、未熟状態で生まれるのだといわれています。しかし、この全面依存こそ非常に重要な意味をもっているのです。

即ち、お母さん（保育者）の胸に抱かれて依存する中で、心が育ち、ことばを憶え、人間としての行動のしかたを身につけていくのです。何気なく行われる自然の営みも、このように大切な意味をもっているのですね。

目が覚めて泣いたら、「はいはい、そろそろ オムツがぬれたかな」と、いつものやさしい声がして・・・気持ちがいいので、おだやかな顔になったら「気持ちがいいね、うれしいね」と、だっこして・・・このような毎日の生活の中で、安心し、信頼できるお母さんの存在がわかり、真似をして一緒にお話したい気持ちが起き、140数億個の脳神経細胞が活発に動き出すのです。

だから、一番大切な最初の先生は お母さん。そして、お父さんや、身近にいて関わってくれる家族の人達だと思います。お兄ちゃんやお姉ちゃんの動きを見ながら、自分も同じように動きたくて「オー オー」と呼びかけたり、手足をばたつかせたりして、仲間に入りたい意欲をみせます。

「学ぶ」は「まねる」ことから・・・と、いわれるように、身近な人達の真似をしながら、家族の一員として、小さいなりに身の自立ができるようになっていくのです。



いよいよ3歳!

「出来るが増えてきて、うれしいけど・・・」

「いい出したら きかないし・・・もう一日中ふりまわされて大変!」

そんなお母さんも多いと思います。

たっぷり愛情を受けて育ち、3歳位になると、ことばの発達にともなって考える力がついてくるので、自我が目覚めます。

今までは、お母さんと一緒に機嫌よくやっていたことも、「いや!」「やらない」といい、いい出したらでこでも動かない、とか「いい子だから お友だちに貸してあげようね」といっても「だめ!」と、きかずあげくの果ては、そばにあるものを手当たり次第放り投げて泣きだすなど、未熟な考えと表現方法で主張し始めるのです。大人から見ると反抗期ですが、幼児から見ると自立の芽生えなのです。

「無理にさせようとする、ますます手がつけれなくなるし」

「だからといって、いいなりにすると、わがままになるし・・・」 悩むところですね。

せっかく育ってきた自我や自分で考えたことを「そんなの駄目よ」と、頭から無視せず、「ああ これはどうしても嫌なのね。じゃあこうしてみようか」というように、子どもの心の育ちを理解し、考える力を広げてあげましょう。時には何をいっても「それもいや」「これもいや」と、全く聞く耳をもたず、更に火に油を注ぐ形になるかもしれません。

そんな時は気分転換。落ち着くまで待ちましょう。どんなにわめいても、最後はお母さんの腕の中です。

「よしよし、この子も順調に育ってきた証拠」と、肯定的に受けとめると、かなり気持ちが楽になり、落ち着いた対応ができるようになります。

自立しにくい要因

ちょっと気になること



その1. 排便の自立

最近、入園児の中にトイレで排便ができない子がいます。昔は、トイレに入ることを嫌がる原因として、「トイレに対するイメージ」や、「厳しい

トイレトレーニング」が考えられ、幼稚園のトイレは幼児にとって、明るい、快い空間にしたり、子ども自身が入りたくなる雰囲気を作ると、入園直後から改善していきました。

最近、オムツがとれている子も、排便時はオムツを要求し、その中にするのです。たぶん紙オムツになり、トイレにつれて行くより処理も簡単で・・・というのが原因の一つかな・・・と、思います。便利さでなく、自立に向けて・・・という視点から考え合いたい問題です。

また、ズボン等もデザイン重視でなく、機能的で幼児が扱いやすいものを選ぶなど、自立を助ける手だてを工夫しましょう。うまくできるとうれしいので、どんどん力をつけていきます。



その2. 夢中であそべる環境

子ども同士のあそびの場面では、思い通りにならないことがたくさんあります。また、逆に抱き合って喜び合う共感場面もたくさんあります。

そんな中でこそ、五感をフル回転させた素晴らしい勉強ができるのです。小さくても、判断力や調整力といった、将来の自立に必要な場面にぶつかり、まわりを観察し行動しながら考えていきます。簡単にめげない3歳児だから、獲得する力も大きいのです。

少子化の今、家庭ではなかなか難しいでしょう。とにかくこのような「子どもの時間」は、心も体も頭もフル回転ですから、短時間でいいのです。いっぱいあそんだ満足感で食事もはかどり、睡眠も深く、心身ともに子どもらしく育つのです。

「うちの子 やられてる かわいそう」「この子とあそんだら」と、あまり管理的に口うるさくいうと、いつまでも大人に依存し、顔をみながら動くようになるし、逆に目を離し放任すると、どんどん親から離れていき、どんな事故に巻き込まれるかわかりません。

「裸足であそんだら、足を洗おうね」「ここは危ないから登ってはいけないのよ」・・・最低のルールをきちんと知らせるのも、判断力の基礎をつくる重要な条件です。

その3 . 自分のこととして考える習慣を

幼稚園では、金曜日に上靴を持ち帰って洗い、月曜日にそれを持ってきます。月曜日の朝「ア、靴がない」「あ、ごめんごめん いまお母さん取って来るからね」といった場面があったので、「自分の靴だから、お母さんの責任じゃなくて、自分で忘れないようにしようよ」と、いってみました。

子どもは「ウン」といって考えましたが、「玄関に靴の絵を描いて貼っておこう」といい、「それはいい考えね」と、ほめました。そのことを他の子どもたちに話したら、とても真剣に聞き、それぞれにアイデアを出し合います。

思う存分あそんだあとの片付けも、「ぼくは オモチャ出さなかった」と、片付けず、「Aちゃんたちが出してた」と、人に責任を押し付けます。

これも、「出したのはAちゃんたちでも、一緒に遊んだんだから、一緒に片付けよう。先生はあそんでなかったけど、手伝ってあげるね」と、いうと「あっ、私もあそんでなかったけど、手伝うよ」「うん、私も。オモチャなくなったら困るもんね」と、片付けることに夢中になるのです。

日常的なほんの小さなことの積重ねが、将来自立して生き生き輝けることにつながるのです。



その4 . それには私たち大人が、自分らしく生きることを考えましょう。

「Aちゃんは英語習ってるんだって」「Bちゃんは字が書けるのに、うちの子はこれでいいの？」 同じ年齢のお子さんのことが気になりますね。「よその子は・・・」「あのお母さんは・・・」と、あまり周りを気にし過ぎると、自分の子どもが見えなくなり、「本当は私こうしたかったのに・・・」と、自分自身の生き方も見失ってしまいます。

みんな違う一人ひとり。それには、ご主人と意見を交換し合ったり、仲間と話し合ったり、ご両親など先輩の意見を聞いたりして、自分自身を確立させましょう。

自立は、さまざまな考えを聞き、「私の考え」をもつことから育っていくのです。

